

# 大学キャンパス内の古墳

名古屋博物館学芸員

瀬川貴文(せがわ・たかふみ)

## 滝子(山の畑)キャンパス内の古墳

名古屋市立大学滝子(山の畑)キャンパスを東側の門から入っていくと、うっそうとした小さな森が目に入る。少し前までかなりの樹木が生い茂り、おどろおどろしい感じがしていたかもしれない。これが八高古墳、「八高」の名はかつてこの地にあった旧制第八高等学校の名残である。



滝子(山の畑)キャンパス 中央の森が八高古墳

この古墳は、元々は前方後円墳だったが、前方部が削られ、現在残っている長さ約四五mほどの高まりは後円部を主とする古墳の一部にすぎない。戦後すぐの航空写真の検討などから、本来は七〇mほどの大きさであったと考えられている。そうだとすると古墳の西側にある広場まで墳丘の高まりがあったことになり、七〇mほどの前方後円墳であればその周りには周濠が巡ることが通例であるから、さらに外側まで古墳の範囲がひろがっていたことになる。

この古墳では、一九八九年に食堂棟の建設にともない名古屋市教育委員会により周濠の可能性がある地点の発掘調査が行われたが、周濠の痕跡は発見できず、周濠についての情報は未確定である。

しかし、この調査で埴輪の破片が出土した。埴輪といえば人物埴輪を思い起こす人が多いかも知れないが、出土する物で多いのは筒形の円筒埴輪である。これが、古墳の周りに何本も立てて並べられていた。八高古墳では、小さな破片ではあるが、

円筒埴輪のほか、家形埴輪、壺形埴輪、蓋形埴輪などの形象埴輪も出土している(見晴台考古資料館蔵)。これらの埴輪の特長から、古墳が四世紀後半から五世紀初め頃に造られたものと判断できる。

残念ながら、人が葬られた埋葬施設に関わる情報は少ないが、今から一六〇〇年ほど前にこの地に七〇mほどの大きな古墳をつくり、埴輪を立て並べた首長が存在したのである。

さて、滝子(山の畑)キャンパスには八高古墳だけでなく、もう一つ古墳がある。八高古墳の北、体育館の南にある高まりが、八高二号墳(別名、剣ヶ森古墳)である。現状で約三〇mほどの円墳と考えられている。

この古墳は、二〇〇九年に名古屋市立大学の依頼により、名古屋市教育委員会が範囲確認のための試掘調査をおこなわれている。一日だけのアスファルトなどが無い隙間を縫った狭い範囲で行った簡易な調査だが、現在の高まりの南側で周濠と考えられる溝状の遺構が検出された。ただ、他の地点では明確な痕跡を検出できず、埴輪などもこの調査では出土しなかったため、古墳の規模や時期を確定できていない。

## 大学周辺の古墳

実は市立大学周辺にはこの他にも古墳がある。

まず、現在の名古屋経済大学付属高蔵高等学校の敷地にあったのが、高田古墳。昭和三〇年ごろに工事により消滅している。名古屋大学による発掘調査が行われ、墳丘長約八七mの前方後円墳で、周濠があったとされる。埋葬施設も調査され、木棺を粘土で覆った粘土槨が発見されたが、既に盗掘をうけ、鉄剣片と不明鉄器片が出土しただけであった。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪があり、その形態から五世紀前半のものと考えられている。

この高田古墳周辺には、小規模な古墳(高田二〜五号墳)があるが、須

恵器など七世紀頃の焼き物が出土した古墳もあり、高田古墳とは時期が異なる古墳群である可能性がある。

また、名古屋女子大学の東にある村上神社境内には、村上おどり山古墳がある。直径約四〇mの円墳で、周囲に幅一〇mほどの周濠があったとされる。埴輪の極小さな破片が採集されている(名古屋博物館蔵)が、時期や特徴を決められるものではない。

このように、大学周辺にはいくつかの古墳がある。特に、八高古墳、高田古墳は七〇mをこえる前方後円墳であり、四世紀末から五世紀前半にかけてあいついで造られた首長墓である。これらの古墳は、この地に有力な首長が存在したことを示している。

大学が立地する周辺は「瑞穂台地」

と呼ばれる台地で、古墳時代には海岸線が今よりも迫っており、熱田台地とともに二股状に伊勢湾に臨む地であった。五世紀から六世紀には大型前方後円墳である断夫山古墳などが造営された熱田台地が盛行するが、その少し前に瑞穂台地が隆盛したのである。ここ

には、伊勢湾に繋がる交通路として、行き交う人々や文物を掌握した人物がいたのかもしれない。そうした人物が、八高古墳や高田古墳の被葬者だったのであろう。

## 大学と古墳

古墳の何が良いかというと、現地でその大きさや高さなどが体感できることである。もちろん、造られた当時とは姿を変えているが、その姿を想像することは至福の時とも言える。

幸いにも市立大学のキャンパス内の古墳は姿を残している。また、通学時に寄り道したり、合間に散歩してまわれる範囲に古墳がまだ残っている。なにより、古墳時代の出土品を見ることができる博物館がある。実物資料を見ながら、古墳やそれが造られた時代という異空間に想像をめぐらせるという経験も学生時代には大切なことではないだろうか。

高田古墳が消滅してしまっており、八高古墳がこの地の歴史を考える上で重要な歴史遺産となっている。そのため、これ以上墳丘が傷つけられることは避けなければならぬが、人々が何気なく見やすいように環境整備されればより良いと思う。



八高古墳出土埴輪  
(見晴台考古資料館蔵)

## 絵葉書からポストカードへ

名古屋博物館学芸員

井上善博  
(いのうえ・よしひろ)

普段、勤務先の博物館でも市民の方を対象に、様々な講義をおこなうことがあり、人前でしゃべることは、随分慣れているつもりではあるが…。大学での講義を、という依頼は、随分久しぶりのことであり、我が子の世代（よりもっと若い）に果たしてどれだけ通用するのか、いささかこころもとないまま話を始めることになった。

それでも社会人聴講生の方が思いの外に多かったこともあって、普段と同じような雰囲気で、画像を多用しながら、戦前・戦後、絵葉書百年の話を「名古屋の観光」という視点でなんとか展開することができた。

昭和二〇年代生まれ（最後の年ではあるが）である小生にとって、戦前・戦後という言葉は、もう身体に刻み込まれて離れない言葉である。しかし、この教室に座って小生の話を聞いている平成生まれの若者たちにとっては、この言葉はどこか遠い世界の観念的なものであって、自明の言葉ではないのではないか…。最近このように感じる人が多い。

名古屋生まれ、名古屋育ちではない小生にとっても、名古屋駅はツインタワーに生まれ変わる前のでんとした姿がイメージに焼き付いており、そうした過去の町の姿を絵葉書で辿るとき、年配者と若者では、捉え方が全く異なるのは当然のことであらう。

年配者の社会人聴講生の方は、一カット一カットに頷きながら、それぞれの人生に重ね合わせながら、記憶をたどっておられる。しかしながら、平成生まれの若者にとっては、今まで見たこともない名古屋の断面を予告なく見せつけられた、というのが正直なところであらうか。名古屋がこんな姿だったなんて…ある意味「新鮮」であつたらう。が、そこには大いなるとまどいも多分に含まれる。自分の知らない名古屋の姿をどう受け止めるか、を提起したからに他ならない。そこが絵葉書の絵葉書たる由縁というか、メディアとしての真骨頂なのである。

絵葉書が、郵便物として正式に日本国内での通用を認められたのが明

治三三年（一九〇〇）、一九世紀最後の年であった。言い換えれば、絵葉書は二〇世紀のニューメディアであると言つて差しつかえない。

すでにその当時からコロタイプ印刷という今でも美術印刷として十分通用する精細な印刷技法を用いた絵葉書は、新聞の挿絵写真よりもはるかにきめの細かい画像を提供することが可能であり、それが絵葉書の用途を広げることになった。すなわち、単なる記念品、土産物に限らず、イベントの記録や主要な観光スポットの宣伝メディアとして、至るところで活用され、また重大事件の報道メディアとしても新聞以上の役割を果たした。

明治末から大正期にかけても、例えば、明治天皇の崩御とそれに続く乃木希典夫妻の殉死事件、第一次世界大戦の勃発などなど、当時盛んに発行された絵葉書は、今では貴重な歴史資料となっている。名古屋のローカルな出来事としても、大正二年に市内の繁華街に立地していた大須旭廓（しんち）で大火が発生しており、その焼け跡の惨状がわざわざ四枚組の絵葉書となっている例がある。これは市内に上水道が普及する以前の出来事であり、およそ水道の存在しない時代など、二一世紀の若者にはぴんとこない「大昔」なので



はあるまいか。

さらにもう一例。不幸な戦争の時代をくぐりぬけ、昭和二〇年代頃に名古屋で発行された一枚の不思議な絵葉書がある。池の中で陽射しを浴びながら二頭のゾウが水浴びをしている光景である。どうやらこれは東山公園の上池のようだ。いろいろ調べた結果、日本国内で唯一戦争を生きた二頭のインドゾウであった。東山公園では戦後再び開園して以後、昭和三〇年頃まで園内各所をパレードして散歩させていたということである。この一枚もまた、時代の証言者である。

そしてもう一つ。平成二一年(二〇一〇)の名古屋開府四〇〇年は各所でイベントが催された。なかでも鶴舞公園は前年に開園百年を迎え、公園自身が登録文化財となった。この公園では、開園の翌年(明治四三年)第一〇回関西府県連合共進会が開かれたが、これを契機に設置されたのが噴水と奏楽堂(野外音楽堂)である。奏楽堂は昭和に入ってから台風の影響でその景観を大きく変容させてしまい、長く味気ない陸屋根のままであった。これが平成年間に入って、ようやく当初の景観に復元された。まさに絵葉書で見える形を、実際にこの目で見るようになるようになったのである。

当初、兜形と評されただんぐりとしたドームは銅板の緑青が鮮やかであり、手摺りの装飾に生かされた音符がいかにも野外音楽堂らしさをもじだしている。百年前の名古屋人のエスプリを見る心地がして、絵葉書と見比べながら「時の案内人」としての絵葉書の豊かな世界から離れられないのである。とはいっても、現代の若者には絵葉書よりもポストカードといった方が、より皮膚感覚に近い身体的にこなれた表現であろう。それはそれでよし。呼び名が変わろうとも、小さな紙片に広がる宇宙は広くまた深いのである。

